The Japanese Alpine Club Kumamoto Section

熊本支部報

（公社）日本山岳会熊本支部

第５２号
令和４年１月 15 日発行
編集・発行者　中林 暉幸
(公社)日本山岳会熊本支部事務局
熊本市中央区帯山 1-25-17-801
山本　直　方

地震からの復興のシンボル　阿蘇の入口立野峡谷に架かる新阿蘇大橋(中央遠景は熊本平野)

目　　次

1　コロナ禍の中の年頭雑感　(支部長)　…… (1)
2　誌上登山教室:バリエーション山行③（土井　理)　…(2)
3　今年度中期（2021 年９月～12 月）支部活動報告
　①　令和３年度秋季森林保全巡視登山　(田北芳博) … (4)
　②　秋の登山教室・三俣山（池田清志)　…… (5)
　③　里山低山クラブ・鹿北キウイ山地　(戸上貴雄)　…(7)
　④　干支の山・牛斬山　(木下洋子)　…… (8)
　⑤　里山低山クラブ・矢部間谷山　(戸上貴雄)　…… (9)
4　寄稿　個人山行　……
　①　大山登山と若山牧水の中国山地踏跡を訪ねて(城戸邦晴)…(10)
　②　四国の石鎚山登山　(中村　寛)　……(13)
5　山岳古道「向霧立越」調査の中間報告　(中林暉幸)　…… (18)

１　コロナ禍の中の年頭雑感　（支部長）中林暉幸

新年あけましておめでとうございます。

地球温暖化による気候変動、それがもたらす大きな自然災害は毎年世界各地を容赦なく襲っています。そして東日本大震災また熊本地震といった天変地異、加えて一昨年以来のコロナ禍、人類の仕業に起因するしないに関わらず押し寄せる災禍は増すばかりです。その一方で世界各地における人類相互の軋轢は絶えません。２年余りに及ぶコロナ禍は、新たな変異株出現もあり収束は見えず先行き不透明、わが国では秋以降の沈静化に一時安堵したかと思えば、今またジワリと頭をもたげています。世界に目を向けると次の大きなうねりに見舞われています。人類の未来に明るい展望はあるのか、新年早々そういった悲観的な見方さえ起きてきます。不安を抱きつつ、杞憂であることを願いながら新年を迎えています。

２　誌上登山教室　　（副支部長）　土井　理

国際認定山岳医でもある熊本支部副支部長の土井理先生による誌上登山教室、今回が第９回目、最終回です。長きにわたり連載のご寄稿ありがとうございました。

バリエーション山行③：阿弥陀北陵

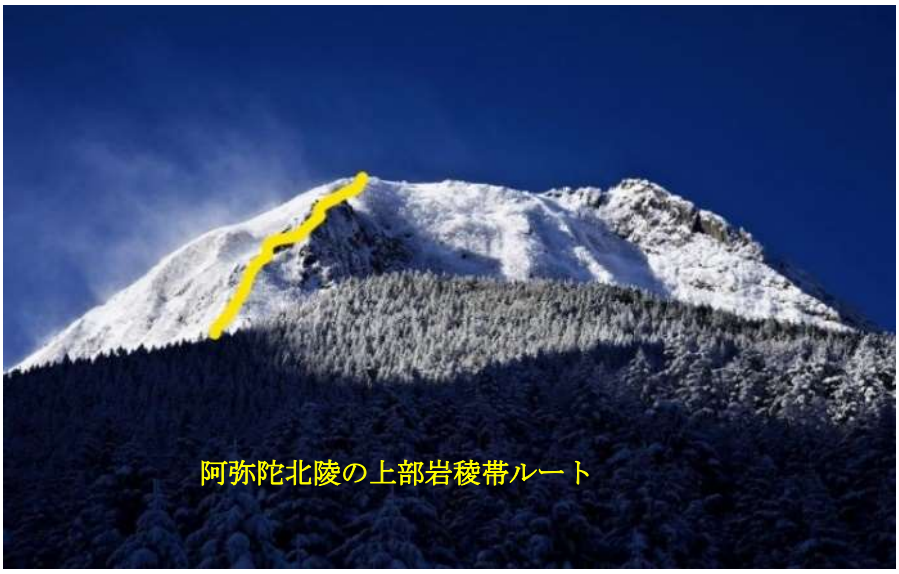
前々回バリエーションルートで初級入門編の「八ヶ岳の大同心稜-横岳 or 硫黄岳のルート」の案内でした。**今回もやはり初級入門編の「八ヶ岳の阿弥陀北陵ルート」**を記載したいと思います。

八ヶ岳連峰への交通機関は、初回に記載していたので省略致します。美濃戸口から北沢ルートでは赤岳鉱泉に、或いは南沢ルートでは行者小屋に向かって徒歩で向かいます。北沢も南沢も冬は上部では道は氷で覆われています。ここで転倒して骨折する方もいます。転倒しない様に慎重に歩いてください。赤岳鉱泉は年中無休で営業していますが、行者小屋は冬期は営業している日が決まっているので注意が必要です。確認して利用してください。初日は山小屋でゆっくり休みます。

翌日早朝、赤岳鉱泉で食事後に行者小屋の前を通過し、阿弥陀北陵に取り付きます。行者小屋の前はテント場になっているので、阿弥陀岳の登攀は行者小屋の方が適当です。荷物は極力軽い方が良いので、不要な荷物はデポして登攀します。

行者小屋から文三郎尾根の方に少し登って行くと、文三郎尾根と阿弥陀北陵の分岐点があります。冬は案内板のほとんどが雪に埋もれて見えません。阿弥陀北陵はバリエーションの入門編で、多くの方が登攀されトレースが付いているのでトレースに沿って、右の斜面を登って行きます。トレースが無ければ、左の斜面を稜線に向かって登って行きます。しばらくは樹林帯の中を稜線へと上へ上へと登って行きます。樹林帯が終わり阿弥陀北陵の稜線に出ますと、天気が良い時には目の前に阿弥陀岳が現れます。結構急な草や木が生えた雪面にピッケルをしっかり刺して、或いは木の枝をしっかり持って、稜線を登って行きます。稜線を登って行くと第一岩稜帯にぶつかります。左側の少しクラックの入った岩の壁を登ると容易に登れます。アンカーボルトもありますが特に使用しなくても容易に登攀できます。第１岩稜帯を越えると第２岩稜帯があります。ここもアンカーボルトもありますが、容易に登攀が可能です。第２岩稜帯を通過しますと、雪に覆われたスノーナイフリッジが出現します。慎重にゆっくり渡って行くと、阿弥陀岳の山頂に到達致します。安全の為にはザイルを使用し、トップの人がアンカー使用し、確保した上で、セカンド、サ

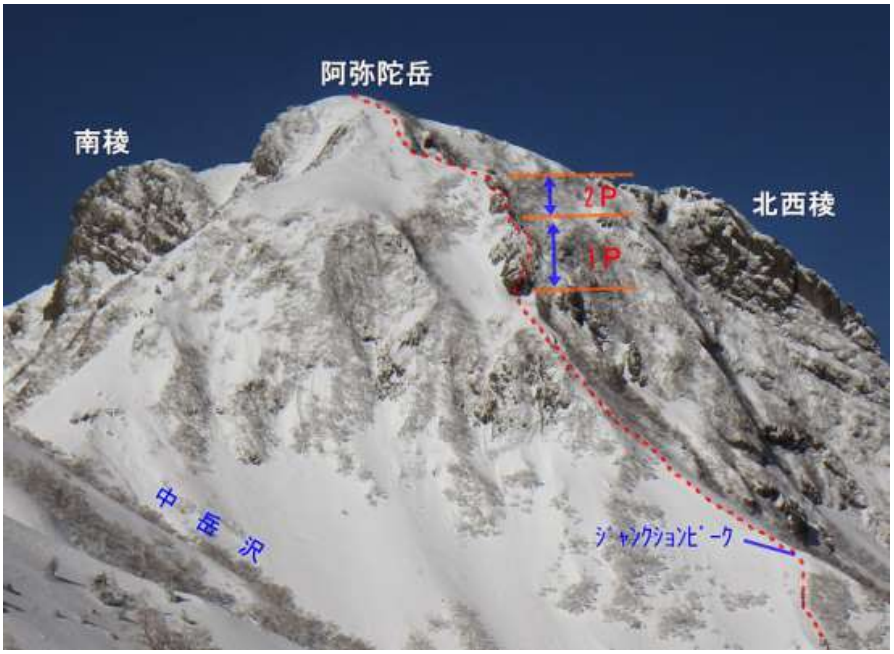
ード、と登攀した方が安全に確実に登攀できます。ナッツやカムは必要ありません。ピッケル、アイゼン、ザイル、スリング、安全環付きカラビナ、クイックドローが 2-3 本 あれば登攀可能です。



阿弥陀岳からの下山は一般的には中岳沢を使用しますが、雪が多いと中岳沢は雪崩が多く発生します。下山に中岳沢を利用する時には、積雪の状態、天候、気温を慎重に判断して下山する事が必要です。雪崩が起きそうな天候や雪の状態の時には、文三郎尾根或いは地蔵尾根を下る事をお勧め致します。

帰りは、デポした荷物を回収して、美濃戸口まで帰ります。その後の帰りのルートは初回に記載してありますので参考にしてください。

阿弥陀北陵は比較的安易に登攀できる人気の冬のバリエーションルートですが、入門編であるが故に、滑落等の事故も時々あるルートです。初めて登攀される時には是非、登攀の経験のある方と、知識と技術のある方と一緒に登攀されて下さい。決して１人では登攀されないでください。安全に冬山を楽しんで下さい。



3　2021 年度中期（2021 年 9 月～2021 年 12 月）支部活動報告

コロナ禍の第 5 波に見舞われたこの夏以降、残念ながら支部活動の多くが中止に追い込まれ、あるいは個人山行に切り替えざるを得ませんでした。

●中止した支部活動

・8/23　花を愛でる会：一ノ峯・二ノ峯　(個人山行に)
・8/29　登山技術研修沢登・菊池渓谷　(個人山行に)
・9/5　九州脊梁トレイルラン
・9/12　干支の山・牛斬山　(11/14 に延期、実施)
・9/20　花を愛でる会・京丈山　(個人山行に)
・10/13　キャンプ同好会・四国石鎚山　(個人山行に)
・10/16,17　ファストエイド講習会　(来年度へ延期)
・11/3　宮崎ウエストン祭

①　令和３年度秋季森林保全巡視登山（三国山・国見山）報告

（担当者　田北芳博　副担当　戸上貴雄）

登山実施日　令和３年１０月１０日（日）　８：30　矢谷渓谷駐車場集合　　天候：晴れ
登山参加者　１４名
　１班　CL 田北芳博　SL 三宅厚雄　城戸邦晴　松尾重勝　中林暉幸　木下洋子　多田和子
　２班　CL 戸上貴雄　SL 池田清志　橋本悦子　山本直　岩下律雄　江島博之　吉本芳之
　別行動　２名（安場俊郎・石井文雄）
行程　宿ヶ峰尾不動尊（登山開始）9：15→三国山山頂 10：00→山口越 10：35→鬼の洞分岐 11：00～11：15→茂田井分岐 12：05→（昼食～12：50）→国見山山頂 13：00～13：15→中間林道 13：45→下山終点（南登山口）14：40　全員集合
　解散 15：20
概要　１０月末で新型コロナウイルス禍に基づく緊急事態宣言、まん延防止等重点措置が全国的に一斉に解除されたうえ、秋晴れの好天にも恵まれ絶好の登山日和となった。矢谷渓谷駐車場に８時半に集合の後、各自の車を下山口（国見山南登山口）に移動し、全員乗用車３台に分乗し、９時１０分には宿ヶ峰尾不動尊の駐車場に到着、９時１５分には２班編制で三国山に向けて登山開始することができた。

三国山頂上集合写真

１０時三国山山頂に着くと、そこには別行動で登山の安場氏・石井氏２名が待っておられた。１１時鬼の洞入り口に着くと、２班は先行で予定登山コースを進んだが、１班は鬼の洞の途中の見晴らしがいいピークまで寄り道した。三国山～国見山間は狭い稜線もあるがシャクナゲが多く、春は特に美しいであろうと思われた。また、要所にはロープが張られており、ロープの助けも借りて歩きやすかった。多少のアップダウンを繰り返し１２時５分に茂田井分岐に到着、大きなアカガシの下で昼食となった。ゆっくり昼食をとり国見山に向けて１２時５０分に出発、国見山頂上直下のロープ場は苦労する者がいるかと思ったが、みんな難なくクリアできたので心配には及ばなかった。国見山山頂は狭くやっとのことで、全員で記念撮影することができた。国見山山頂は周りに樹木があり見通しはよくない。

国見山山頂集合写真

下山は南に急勾配の登山道が続いた。以前は悪路だったとのことだが、現在はロープがいたるところに張られており、その手助けを受けながら下山した。急勾配の下山が続くので、滑らないように注意して下山した。登山靴が緩いとつま先を痛めるので要注意である。長時間の歩行で下山中に足を引きつった者がいたが､軽症であったようである｡15:20 分には下山口全員集合、解散することができた。車提供者は宿ヶ峰尾不動尊へ車回収の後、帰路に着いた。森林巡視登山として国有林を歩いたが特に樹林として問題点には気づかなかった。自然林の中で快適に歩けた１日であった。

※車両提供者　中林　岩下　田北　三宅

３台の車に分乗し登山口（宿ヶ峰尾不動尊駐車場）に移動した。下山後解散、１台の車に運転手３人を乗せて車の回収をした。

(報告者　担当　田北)

ロープ場を下山する合

②　秋の登山教室【三俣山】報告

担当　池田清志

１．期日：令和３年 10 月 23 日(土)

２．場所：くじゅう・三俣山（周回コース）

３．集合・解散：

　集合：　大津駐車場 6：00 までに集合、　6：05 出発

　解散：　同　　上　16：50 到着、　　17：00　解散

４．参加者：14 名(うち２名、安場・石井さんは別行動をとるため大津からの行動は 12 名となる)

　中林暉幸、橋本悦子、浦川留美、本田敦子、田北芳博、木下昭二、岩下律雄、

　坂本雄二、江島博之、池田清志、城戸邦晴、山本　直、石井文雄、安場俊郎

５．経費(配車ガソリン代・保険料など)：　１人 1100 円×12 人＝13200 円

６．日程・コース

集合時間の 10 分前には参加者はほぼ集合。まだ夜明け前の薄暗い中、配車計画(中林車、田北車、池田車)と地図を配り、すぐに乗車、6:05 出発。6:55、三愛レストハウスでトイレ休憩、7:20 大曲登山口着、すでに周辺は路肩駐車車両で埋まり、カーブから牧ノ戸峠よりに 500m 地点に駐車する。7:40 - 7:50 カーブの登山口にて出発準備、支部長挨拶の後、出発。9:00 すがもり越、峠付近は晴天の休日でもあり、かなりの登山者で賑わっていた。西峰までの登りは、たびたび数珠つなぎになる。

9:40 - 10:00 西峰、集合写真。

10:25 - 10:30 第Ⅳ峰、南風が吹き抜けて寒い。

10:50 - 11:20 南峰(昼食)、ここも西側からの風があり、東南側(坊がつる側)で弁当を食べる。

集合写真(①)の後で、北峰周回コース(60~80 分)を行く 8 人と本峰経由ですがもり峠に行く 4 人に分かれる。

北峰周回コースを回る登山者は反時計回りが多く時計回りは少ないらしいが、それでも反時計回りで行く我々とすれ違うグループは 4、5 組を超えた。

写真①　南峰山頂、昼食の後

安場・石井さん組とは南峰に近い所で出会い、すれ違った。灌木や岩場を行くので、歩きにくく、枝が体やザックに当たる。三点確保でしっかりと昇降を強いられる。紅葉はかなり進んできていて、撮影ポイントも多かった。

12:15 - 12:25 北峰。山頂は狭くて人も多いのでゆっくりできなかった。

13:00 - 13:17 本峰。集合写真撮影後出発。

14:00 - 14:10 すがもり峠。先着の 4 人は 1 時間以上の停滞となり、待たせてしまった。

写

写真② 小鍋”のあたりの紅葉

15:00　大曲登山口、整理運動、乗車後、15:20 出発

15:30 - 15:45 三愛レストハウスでトイレ休憩、

16:10 - 16:20　手野の名水で休憩、

16:50 大津駐車場、解散式、支部長挨拶・諸連絡

17:00 解散

（報告、池田清志）

右写真(③帰路の集合写真

すがもり峠の下り、硫黄谷入口で

③　≪里山低山クラブ ≫鹿北キウイ山地：雌岳、姫御前岳、雄岳　　記録/戸上

2021(令 3).11.13（土）　　参加者７名 ☞ 池田、石井、田北、戸上、中林、本田、山本

鹿北町柚木集落の先、殆ど福岡県八女市との県境に近い鹿牟田峠の路肩へ集合した。

４台をここへデポして残り３台でグリーンピア八女駐車場へ移動し、紅葉したモミジバフウの下を歩き出す。

晩秋の雰囲気を味わいながら、遊歩道から林道へと、比較的整備された道を進む。

最初の山頂　雌嶽 595.9m 三角点

林道から入り込んで雌岳山頂を踏み、そのまま周回して林道へ下りる。

何処かしこで見られるキウイの茎や葉に生えている剛毛を眺めながら進み、姫御前岳へピストン、と思いきや、私以外の６人は山頂から薄藪の稜線へと突撃！

150m ほど先の林道で落ち合い、最後の雄岳へとさらに林道を進む。

林道の果てにあるのが雄岳！

コース中間点にある姫御前岳 514m 水準点

山頂からは福岡県最高峰の釈迦岳や御前岳がよく見える。

帰路は姫御前岳近くまで林道を戻って、途中から南へ山道を下り、「姫御所さん」という祠の前を通過して道無き薄藪を下り、林道に出てまた延々と林道を歩いて鹿牟田峠へ到着。

デポしていた車でグリーンピア八女へ移動して解散した。

総じて楽ちん散策山歩きだった。

弁当を広げた雄岳 532.0m　三角点

09:26 グリーンピア八女駐車場を出発 ～ 10:59 雌岳 ～ 11:43 姫御前岳 ～ 12:35 雄岳 ～ 14:13 姫御所さん ～ 薄藪を抜けて 14:32 林道に出る ～ 15:13 鹿牟田峠に到着

〈 歩行距離 7.5 km、所要 5 時間 47 分、上り 579m・下り 753m 〉

④　干支の山・牛斬山

担当　木下洋子

1. 日付　令和 3 年 11 月 14 日（日）
2. 場所　福岡県香春町
3. 参加者（敬称略）
   中林　安場　石井　池田　城戸
   山本　田北　松尾　多田　木下
4. 行程
   熊本北区役所（7：00）出発
   植木インター（7：13）　広川 SA（7：45～55）　甘木インター（8：15）
   大任道の駅（9：20～30）　採銅所駅（10：00）　矢山登山口（10：20）　牛斬山 518m（11：35）　山頂出発（12：30）
   牛斬峠（13：10）　五徳越峠（13：45）　道の駅香春（20 分）
   熊本北区役所（17：25）解散
5. 概要

当初予定していた 3 月 6 日はコロナ禍の煽りで 9 月 12 日に延期、その日もまん延防止等重点措置で 11 月 14 日に変更する。

感染者も少なくなり、やっと牛斬山山行が実現した。参加者が 10 名だったので自家用車 3 台に分乗して定時に出発した。

矢山登山口手前に駐車して竹林脇を少し歩き、堰堤横の登山口から入る。沢沿いの杉林をつめて登るが瀬音が耳に心地良かった。杉林の下草はフユイチゴの群生で真っ赤な実をたくさん付けていた。朽ちた倒木も多く、色々なキノコが生えていて、ナメコがあった様だ。途中、立ち休をして冷たい干し柿を皆で食べた。

円陣の滝への分岐から山頂へ向かうと 20 分程で前方が開けて稜線に出る。福智山山系への分岐から、わずかな急坂を登ると牛斬山 580m山頂。ここで昼食とする。山頂は所々に花崗岩が点在する草原で眺望も良く「国見岩」に上がると前方には小説「青春の門」の冒頭に異様な山容とある三の岳、二の岳、削られて低くなった香春岳の三峰が大きく迫り、遠景に英彦山山地、貫山、平尾台、行橋市街地が見えた。

約 1 時間の昼食休憩後、岩尾別れ分岐まで下り、牛斬峠への稜線を歩く。稜線沿いには色々な山野草が咲いていて、見かける度に声があがった。リンドウ、カワラナデシコ、ヤマハッカ、エンゴサク、ミズヒキ、サネカズラ等。牛斬峠をすぎ五徳越峠に向かう。桧林脇の急坂の下りが続き、道がえぐれて歩き辛い所もあった。途中前方を見やればきれいな三角錐の三の岳が見えた。五徳越峠に下山後、季節の風景を楽しみ乍ら村道を歩く。ピックアップ後清祀殿には寄らず道の駅香春に立ち寄り帰路についた。北区役所に到着、支部長からの挨拶の後解散した。

この度の干支の山登山では、やはり天気予報は気がかりで、発つ時の小雨や高速道から見た彼方の雨雲も香春に着く頃には太陽に変わり良かった。下見の季節との違いを気にしていたが先輩方は温かい目線であった。

安場さんには下見の時から色々と教えて頂き、学ぶ事も多くお世話になり感謝しています。牛斬山登山が無事に終わってホッとしています。

(報告　木下洋子)

⑤　里山低山クラブ「 矢部間谷山（東峰・本峰・西峰）」　記録/戸上貴雄

2021(令 3).12.09（木）　参加者７名 ☞ 安場、池田、坂本、戸上、中林、本田、山本

[歩行距離 11.5 ㎞、所用 5 時間 23 分、累積標高差約 770m]

益城四山の向うに熊本市街・金峰連山や雲仙方面をも見晴るかす林道歩き（写真/池田）

「天気、空気、空、道、展望」の五拍子揃ってグッドな、誠にグッドな里山低山歩きだった。

中島小学校駐車場へ集合の上、３台に分乗して林道間谷線へ移動し、路肩駐車して歩き出す。

三角点愛好者の多い顔ぶれだったため、当初計画では省略するつもりでいた東峰(798.1m)をまず藪漕ぎピストンする。(選定鋏を持参していてよかった！)

林道へ戻ってテクテク歩きの末に、また山道へ入り込んで難なく本峰(812m)へ到着するが、植林地のため展望なく、早々にそのまま歩を先に進めてまたまた林道へ下りる。

さらに稜線の山道と林道歩きを繰り返すと西峰への取付地点に着き、ここから短い急傾斜を乗越し、フユザンショウなどの棘植物と格闘しながら進むと最終目的地の西峰(794.2m)へ到着する。

この西峰山頂からの展望(約 340 度) は素晴らしい！　里山低山ここに極まれり、万歳 !!

４　寄稿（個人山行）

①　大山登山と若山牧水の中国山地踏跡を訪ねて

城戸邦晴

大山といえば志賀直哉「暗夜行路」の終章で描かれる壮大な夜明けの場面が思い浮かぶ。私はそれを見たかったが、今回 M 氏と同行したのでそれはあきらめた。車で移動し、伯耆大山に登り、帰りに若山牧水の記念碑を見るという旅行提案に彼が快く応じてくれたのに私は感謝していた。御来光のための夜行登山や山頂小屋泊など望むべくもない。10 月 28 日登山実行という計画を立てた。ちょうど紅葉が見られるだろう。

紅葉の伯耆大山に登る

27 日に中国自動車道から松江自動車道を経て山陰に出て、米子のビジネスホテルに入った。翌朝は6時過ぎに大山に着いた。麓から見上げると大山の頂上には雲がかかっていた。夏山登山道を登るか、大山寺から行者道を登るか迷ったが、結局夏山登山道から登ることとした。上り口で出会った人から、皆さん夏山登山道から登りますよと聞いて、逆に行けばすれ違うときが面倒と思った。佐陀川にかかる橋を渡ると南光河原駐車場、多くの車が駐車し人も多かった。傍らの道を登り始めたのは７時。黄色に色づき始めたブナ林の中を木の階段がずっと続いていた。自分は階段を登るのは慣れているので苦しくはなかった。登山道には一合目から標識があった。二合目三合目と続いていた。六合目の避難小屋に着くと頂上が見えると期待していたが、周囲は薄くガスに包まれていた。そこには展望できるはずの山と名称が描かれた大きな看板が立っていた。見えないときはこれで我慢をと言わんばかりに。30 分ほど待ったがガスは晴れず、登り始めた。その先は樹木は低くなり足元は岩の急な登りとなった。八合目を過ぎると板の上（木道）を歩くようになった。見回すと周りはすべて特別天然記念物のダイセンキャラボク。木道はずっと続いていた。どうやら山頂台地に出たようだ。標高差の割に、どうということもない登山道だ。相変わらずガスが周りにうっすらとかかって遠くの景色は見えない。弓ヶ浜半島も当然見えない。右・石室と書かれた分岐に出て、左をとった。木道の上をずっと登って行く。ゆっくり傾斜していて歩きやすい。また二つに分かれている。木道は８の字状に交差しており、小屋が正面に見える。今度は右にとって登ると頂上に出た。弥山(みせん)1709M、10 時だった。頂上は数段の板の階段状になっており、野外音楽堂のような感じだ。人が思い思いに腰かけて休憩をしていた。「大山頂上」と書かれた石碑が立っていた。まだ新しい。周囲は雲が流れていた。最高地点の剣ケ峰を見ようと思うが、縄を張ってあり、その先の高みの稜線で遮られて見えない。縄に沿って移動して端まで来たら見えた、と思ったら雲が邪魔をする。辛抱し待っていたら一瞬雲が切れて見ることができた。（南側斜面の崩壊が進み危険なため昨年８月に山頂石碑を移設し、縄もその時に崖から離して張ったようだ。大山は崩壊を続けているから安全上仕方がない。しかし山頂からの眺望がロープで制限されていることには失望した。）

元谷避難小屋

山頂は風が強く、食事はパンのみで済ますことにした。ガスストーブで食事を作っている人が二

組あった。風が強くても平気な様子だった。若い娘が楽しそうな表情で登ってきて私の横に座った。山が楽しいみたいだねと声をかけたら笑ってうなずいた。なんでも阿蘇山の中岳に登って山が好きになったという。そういう人もいるんだなと思った。眼前には頂上避難小屋があり、屋根に数人の人が乗ってソーラーパネルの取付け工事が行われていた。食事を終えて、小屋の中へ入ってみた。案外広かった。登山者がカップ麺を手に抱えて、どこに捨てたらよいかと売店の係に尋ねていた。持ち帰ってくださいと言われて意外そうな表情をして、さらに、残り汁はどうしたらよいかと尋ねた。係の人は困ったように、どこか他人の目につかないように捨ててください、本当は駄目なんです、と。私はたまりかねて、汁は全部飲むんですよ、それか初めから少なく湯を入れることですと言った。私がザックにつけていた森林パトロールの腕章にその人の視線がいった。その人はうなずいた。彼は特別天然記念物のダイセンキャラボクの根っこに捨てるのだろうか。自然への畏敬の念はないのかと腹立たしい思いだった。小屋の番人にしても、あれで特別天然記念物が守られるのか、ふがいない。

11 時半に山頂を後にし、六合目の避難小屋まで来たが、やはりガスが山頂を覆い、全体は見えない。志賀直哉が暗夜行路に描いた壮大な風景は結局見ることができなかった。また来ねばならない。ガスが晴れるのを待っているとき、中高年の夫婦がトイレを使おうと小屋に入ったが、ここは携帯トイレ専用、排泄物を持帰るようになっているのを知って、それなら我慢すると言いながら出てきた。憤慨の様子だった。先ほどのカップ麺といい、この夫婦といい考え方が間違っている。こんな人が我々の周囲にもいないだろうか。食べ残しを捨てるとか、果物の皮や種を足元に捨てる人はいないだろうか。自然に還る物は捨ててもよいのだと考えている人は意外と多い。プラスチックも食べカスも山を汚すことに変わりはないのに。携帯トイレも使う登山者がもっと増えて欲しいし、我々山岳会員は模範でありたい。

大山の下りは行者谷コースをとった。黄に色着いた木々の中を急な木の階段をずっと下った。これが大山の特徴で、土の流出を防ぐためか、夏山のルートはほとんど階段である。面白くない道であるが、風景がそれをカバーするように美しい。急斜面を下って元谷に出たらそこから眺めた大山は雄大だった。山巓には雲が懸っているのだが、あれが山頂からの視界を遮っていたのだ。河原には多くの人が休んでいた。大山は雪が多い、聞けば冬には大量の雪で段木が隠れてしまうという。雪面を踏んで登るらしいので、その季節にまた来ようと思った。何度来れば満足するのだろうか。大神山神社まで下りて来て、あとはゆっくり大山寺を見物しながら下って 2 時に門前町へ出た。

鍵掛峠へ

その後、大山環状道路を西から南へ車で走った。南から大山を眺めることが次の目的だった。午後も時間が過ぎて、山頂にはもう雲はなかった。桝水高原スキー場に出た。ここで見える大山は左右にバランスの良い円錐状をしており、伯耆富士と呼ばれるにふさわしい美しい形だった。スキーのリフトが動いていたが、もう時間がなかった。車に乗り南東へ走ると森が開け大きく崩壊した谷が現われた。一ノ沢だった。二ノ沢、三ノ沢と続いた。大山はまるで異なる山容だった。下流には砂防ダムが建設中だった。再び車に乗り、幾度もカーブしながら黄色く色づいたブナの原生林を走り抜け、開けた場所に出ると展望所で、カメラを持っ

鍵掛峠からの大山

た多くの人が大山を撮影していた。そこは鍵掛峠だった。ここから見た大山は美しかった。紅葉した森の上に餓々たる稜線が連なり南壁が西陽に照らされていた。空気が水蒸気を含み鮮明さに欠けるのが残念だったが、それは実に雄大な景色だった。カメラのシャッターを何度押しただろうか。まわりの人達も同じようにカメラにしがみついていた。

若山牧水の踏跡を訪ねて

翌日、帰路は米子自動車道を経て中国自動車道を走った。新見インターで降り、若山牧水の中国旅行の足跡をたどった。牧水は明治 40 年の夏に郷里宮崎へ帰郷するとき中国山地を歩いて旅したのである。私達はまず苦坂峠（にがさかとうげ）、今は川面峠（かわもたお）と呼ばれる細い山道を車で登って行ったが、道の両側に樹木が繁り景色はあまり見えなかった。途中、この道で間違いないか不安になり、通りかかった軽トラックの人に尋ねたら牧水が通った道に間違いないと言う。まだ若い人だったが知っていてくれたのが嬉しかった。左側に深い谷が走りその底に川が流れていた。阿哲（あてつ）峡の渓流であった。この峠道を通ったときに詠んだ歌が**「幾山河越え去り行かば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく」**であった。牧水の歌でもっともよく知られている一首である。渓谷の底を線路が走っている。伯備線であった。列車が低い音をたてて通って行った。坂道を下っていくと樹々の間から遠い山並みが望めた。これだな歌の風景は、と思って嬉しくなった。昔風の駅が現われた。備中神代（こうじろ）駅だった。駅の前には古い雰囲気の家並みが続いていた。さらに走ると人家がまばらでのどかな田舎の風景が続いた。両側に山々が連なっていた。次の行先は二本松峠、ここは岡山と広島の県境である。緩やかな峠道で古道が残っているのだが、地元の人に聞いてみると自動車の通行は厳しいとのこと。私達はあきらめて国道を走った。峠は公園になっており、**熊谷屋**（くまたに）という旅館が復元されていた。当時牧水は早稲田の学生、帰郷の旅路の途中にこの峠で行き暮れて熊谷屋という茶店兼旅館に泊まった。ここで牧水は友人にハガキを書いた。そのハガキには二首の歌が書かれていた。一つは「幾山河」の歌、二つ目が**「けうもまたこころの鉦（かね）をうち鳴（なら）しうち鳴（なら）しつつあくがれて行く」**という歌であった。山道を歩いている時など自然と浮かんでくるような抒情的な歌である。復元されていた熊谷屋は一軒の民家のような大きさで小奇麗な外観をしていた。周囲は落ち着いた公園で、いくつも歌碑が立ちその説明板が立っていたが、訪れる人もなく、我々のほかには犬の散歩にきていた老人だけであった。静かで牧水の滞在した空気を感じようとしばらく佇んだ。やがて退屈した M 氏に促されてそこをあとにした。いずれまたゆっくり来よう、そのときは旧道を歩いてみようなどと考えながら。

二本松公園熊谷屋

②　四国の石鎚山登山　　中村　寛

10 月 14 日(木)～16 日(土)

参加者、中林、安場、石井、中村

先にキャンプ同好会で案内しましたが、コロナ禍の中、車中での同乗時間が長く、また宿泊を伴うなど考慮して早期に同好会としての活動を中止としました。今回は、有志だけの登山に変更させていただきました。先ずこの件について皆さんにお詫びしたいと思います。次回は、新たな計画を立て、四国の石鎚山の案内を出したいと思います。

１０月 14 日(木)

7：00　大津出発

10：00　大分　佐賀関から九四フェリーで四国へ、1 時間 10 分の船旅。

四国の佐田岬半島には、沢山の風力発電のプロペラが岬の道路近くまで造られ回っていた。騒音がうるさいから止めているのか？また故障なのか？回らないプロペラが、ここにも見られた。

12：40　道の駅で食事、刺身を食べたい私の希望でこの時間まで頑張って探したが、食事処が、熊本程多くない。仕方なくここでお昼ご飯。出できた料理に、安くはないのに、また皆お腹が減っているのに美味しいと一人も言わない。文句は言わねど、愚痴は言う、今日は、私もその一人だった。その後休憩無しで土小屋を目指す・

16：30　石鎚スカイラインを登り、翌日泊まる、土小屋の国民宿舎に安場さんのバイクをデポする。ここは、1500M 地点、宿舎に着くと北東側はガスが出できた。このスカイラインは、夜間は通行止めになる。後で聞いたらガスの為でなく、崩落の危険があるからとの事だった。途中、明日登る石鎚山の雄姿を眺める事ができる場所で写真を撮った。

17：00　面河渓谷に着くが、途中、私の希望で石鎚山の資料館に立ち寄る。立派な資料館で近くにきたら一度立ち寄って欲しい。阿蘇より古い 1500 万年前の火山活動で形成された事。九州ではもう絶滅した熊がいる事等、30 分程館内にいて付け焼き刃の知識を身につけた。

17：30　面河渓のキャンプ場でテント泊、

綺麗な渓谷で夏は、賑わったと思う。登山でのキャンプは、水とトイレは、必要条件、ここのトイレはホテル並みに清掃されていて感心した。こちらからの登山客は、少ないと思ったが数台の車が見られた。４人で食事、テント泊、街の灯り見えない中、空の星が沢山瞬いていた。3 時には中天にオリオン座が主役を張っていた。この頃 2 台の車が来て、キャップライトを点けて 4～5 人で登り始めた。しかしこのコースをこの時間では難しく 5 時前にはライトを点けて戻ってきた。心配して若者たちと話した安場さんの話では、登攀コースを安全な土小屋からに変更したらしいとのことだった。石鎚スカイラインは、夜 6 時閉鎖、朝 7 時開通になっているので 7 時まで待つようだった。

10 月 15 日（金）

4：00　起床　食事

6：10　出発

面河渓の渓谷沿いに歩き登山口まで 40 分。紅葉シーズンなのに辺りに他の登山者はいないし、先行する人もいない。石鎚山は修験の山。表参道は北東側にあり、私たちが登る面河渓のこのルートは裏参道にあたる。当然修験の山道は、厳しい。しかし前半は、修験の道らしく以前整備されたのだろうか、暫くは歩きやすい石畳の道が随所に見られた。清流と切り立つ岩壁を眺めなが

ら歩くと鳥居のある登山口に着く。ここから標高差 1100 メ･トル以上、急勾配。6 時間程で日本百名山の著者、深田久弥も歩いたコースを一気に登る。

8：20　霧が迫の水場

ここで休憩。水場は先にもあり補充できる。ここからはかなり急斜面が続く、左に面河山があるが南に伸びる尾根に出ると、右に鋭い岩峰の石鎚山が見える。右から南尖峰（なんせんぽう）、天狗岳、弥山（みせん）と連なる頂を望みながらの贅沢な登りが、始まる。迫力ある光景に何度も足を止め、写真を撮る。石鎚山は、総称で先の 3 山をいう。この 3 山を右手に見ながらの登山が、この面河渓ルートの一番の魅力だろうと思った。

ここから勾配は、緩くなるが、断崖に設けられた幾つもの木橋は、滑りやすく、何より腐りかけている所が多い。崩落箇所をザイルで渡る所もあり危険、慎重に渡る。

10：45　愛媛大学山岳部の石鎚小屋着

ここで食事をとる。後ろから来たソロの地元の女性も一緒に食事をして暫く話し込む。一期一会かも知れないけど色んな話をして、また楽しい。ここは、避難小屋としても使われるそうだが、カギがかかっていて中を見ることは出来なかった。入れると聞いていたんだけど。バイオトイレは、すぐ下にあり利用できる。ここからの右手に見える石鎚山の眺めはまた格別。目の前の岩壁の上に石鎚神社が見える。ここから滑りやすい岩場、朽ちかけた木橋、崩落箇所のトラバ･スがあるが、ここを超えれば残りは鎖場だけ。ここを踏破すると視界が一変する。

原生林から一転してササの原っぱが現われる。阿蘇の草原を思わせるが、草でなくササだ。数年に一度花が咲きお花畑になると後で聞いた。先行する先ほどの女性が、ソロでこのササ原を歩いて行く。絵になっている。

（岸壁の上に石鎚神社が見える。手前は、草原に見えるが、ササの原っぱ）

遅れて出発した私たちも暫く歩くと、難関で名物の＜三(さん)の鎖場＞に出る。もう頂上は、すぐそこ。ここで北東側からの表参道と合流する。多くの登山者が、登り、また降りていく。

最大のハイライト、三の鎖。鎖場は、3 か所あるが、ここが一番厳しい。ほぼ垂直の岩場を約

70 メ-トル登る。ここは、修行の行場で登山道でなく大半の登山者は、神社まで安全な道を巻いて上がる。鎖を前の女性が、私と話して気合を入れて登って行く。私たちも、当然登る。鎖は他の山に見られない大きさで、寄進した信徒の名前が全てに掘られていた。最初は、名前を見ながら登っていたが、その余裕も直ぐに無くなった。先に登る石井さんが、途中で止まり、私にアドバイスくれる。「良いから早く先に行って」「こんな所で止まらんで」最後は更に傾斜が、厳しくなり、足を止める鎖も途中から付けてあるが、揺れて動いて用を足さない、最後は、腕力で登る。登り切ったらそこが頂上。石井、中村、中林と無事に 3 人登ることができた。下りの鎖もあるが、登りよりも下りが厳しい。当然帰りは、安全な道を選択。

1：30　頂上着

石鎚山の弥山には、石鎚神社がある。神職の方もおられた。そこには 100 名近く登山者が、写真を撮り休憩、食事をしていた。ここから天狗岳の紅葉を見る。雑誌等でよく見る光景が、ここにある。Facebook の登山 G では、この 1 週間毎日この光景が、投稿されて期待を高めていた。やっと同じ光景を共有できた。

（石鎚山頂上の神社　多くの登山者が寛いでいた。）

少しの休憩の後、天狗岩に 3 人で向かう。弥山と異なる、ゴジラのように切り立った岩場が、西日本最高峰になる。弥山より 20 メ-トル程高い。向かう細い尾根は、北側は垂直に切り立った断崖、反対側も急傾斜の断崖で足を踏み外せば、はるか下の谷まで落ちていく。戻ってくる数名の登山者と狭い尾根ですれ違う。危ないので途中で私はザックを降ろした。ザックで押されたら谷まで落ちてしまうから。天狗岩には多くの登山者がいて、写真を撮り、腰を下ろして感動に浸っていた。

（最高峰の天狗岩から石鎚神社を見る。多くの登山者が、尾根を伝ってこちらに登って来る。）

（石鎚神社から見た天狗岩、この景色を見るためにここに来た。）

2 時 20 分　下山

天候はよく紅葉シーズンにも間に合った。この後再び神社まで戻り今夜の宿泊場所の土小屋の国民宿舎まで降りていく。帰りは、早くも北側には、ガスがでてきて、尾根迄迫っている。昨日もそうだった。石鎚スカイラインが、通行止めになるため安場さんは、先に面河渓のキャンプ場

に車をとりに行った。コロナが納まりかけ規制が解除されたためか、宿泊客が、戻ってきているようだった。お風呂の後ビール、食事、また部屋に帰っての延長戦。前日のお昼ご飯で厄がとれたのか、今日は、満足の一日になった。ここは 1500 メ･トルありガスもでて冷えてきた。

窓から見える近くの山並み、瓶ヶ森の山容は、茜色に染まり、また来ようという思いを募らせるように、やがて夕闇に消えて行った。

10 月 16 日（土）

土小屋の国民宿舎を発ち、往路を辿り帰熊、解散。

追記　　20 代に博多に住んでいた頃、小倉から夜、フェリーで松山まで行きユースホステルに泊まり、ソロで石鎚山に登った。当時の記憶は、行きの高速道路で警察に捕まった事、石鎚山の三の鎖、石鎚神社、天狗岩の頂上等、点でしか覚えていなかった。ただ私の誕生日だったその日は、坂本九さん等 500 名余りが乗った日航ジャンボが激落した日であった。山では情報がなく、下山して初めて知り悲しい気持ちで帰ったことを覚えている。流れてくる九ちゃんの歌を聞くと今でも辛い。またいつか石鎚山に登り心の整理をしたいとずっと思っていた。今回は、来られて良かった。

５　山岳古道「向霧立越」調査の中間報告

日本山岳会では、創立 120 周年記念事業の一つとして、120 の全国山岳古道を選定し、全国各支部に調査を委託して集約編纂したうえで、各種の文献等として公開、保存することになりました。昨年春には当面 59 の第 1 次調査古道が発表され､逐次調査が行われています｡熊本支部の割り当てとしてはまず、**山岳古道「椎葉村を巡る古道：向霧立越」**の調査を担当することになりました。

コロナ禍の中、制約も少なからぬところですが、支部の調査は、毎月の支部通信でもいくらかお伝えしていますように、支部推薦の他の古道を含め、各種の資料収集や予備調査など、関心を持つ会員による下調べも少しずつ行われてきました。現地調査としては過去 3 回ほど、向霧立越の現地に入り、その端緒を掴んだところです。まだ調査は途上ですが、その概要を報告します。(中林)

2021.9.23(木)､24(金)　向霧立越調査①　宮崎県椎葉村萱野登山口～五勇山

向霧立越の宮崎県側の入口、椎葉村萱野登山口から五勇山までの現地調査、調査参加者(安場、中林)
(9/23)　椎葉村観光協会を訪ね椎葉村史のコピー等を提供してもらう。この日は石堂屋麓でテント泊。
(9/24)　4:00 起床、撤収、5:30 出発移動開始、5:50 尾手納地区公民館の少し上、村道尾手納線終点、五勇山・国見岳登山口着、準備中に近くの甲斐益男さん(役場勤務)という方と会いしばし立ち話。登山者もいくらかあり、山道を刈り払うなど整備していて、道ははっきりしているという。6:00 登山口の写真を撮り出発。沢の右岸を 5 分行くとロープを渡した渡渉地点、少し足が濡れるほどで渡る。すぐ上流に 5 mほどの滝がある。檜林に入り左折、杉の伐採地をジグザグに登っていく。地図ではかなりの急登と思えたが、しっかりした径でジグザグにとれば牛馬でも登れる。駄賃つけ道として使われたということが頷ける。しばらく檜林や杉林。地図にある小道からはかなりずれている。7:10 涸れ沢、少し水の音がする。杉から広葉樹に変わる。7:30 沢で左折、10 分ほどでまた沢、水少し、ヒメシャラ、トガ、ブナ等多くなる。さらに 1 時間ほど登るとミズナラの大きな倒木、これを越えるとブナ、ミズナラの大木が目立ってくる。8:30 尾根筋、石堂屋から国見岳・五勇山への稜線に突き当たる。スズタケを払ってある。小休止後 8:43 出発。稜線はカエデ、ミズナラそしてブナの大木が多くなり、深山幽谷の様を呈してくる。Ｐ1644mに登らず、左側斜面をトラバース、9:19 再び尾根に出る。アセビ、シャクナゲが見え、右斜面を行くようになると五勇山も近い。9:30 五勇山頂(1664m)着。急登はなく着いた。牛馬も通行可である。ここから左は鳥帽子岳へ、右は国見岳へと分岐する。今回の古道調査としてはここまでとし峰越へ下山する。

椎葉村萱野　国見岳登山口

萱野の登山口からすぐの渡渉地点

矢筈岳
遠見山
緑川
箱積山
久保の息
切剥
天主
笑主山
内大臣川
丸山
三方
竺方山
椎矢峠
高岳
高岳
向坂山
尚坂
白竺
霧立越
国見岳
国見岳
雷坂
雷坂
耳川
五勇
笠勇山
烏帽子岳
石堂
石堂屋
椎葉越
時雨岳
おとう越

2021.10.30(土)31(日)：古道「向霧立越」調査②・山都町鮎の瀬～久保の息

向霧立越の調査第 2 陣。調査参加者 7 名 （安場、城戸、中林、石井、山本、池田、田北）

31 日 7 時、鮎の瀬大橋集合。安場、石井、中林の 3 名は前日 30 日から入り、夕刻、翌日の登山口の確認のため、囲集落から林道矢部清和線に入り、矢筈岳登山口まで確認、引き返す。この日、鮎の瀬大橋傍らでそれぞれ車中泊。

10/31　未明にかなり降った雨も朝には上がって星もいくらか見える。この日参加の 4 人を待って 7 時前、車に分乗して出発、まず昨日確認した林道中間の下山口に車を 1 台デポし、8:05 出発、林道わきの尾根筋にとりつき入山する。すぐ杉林の中の稜線、径というものはないが稜線を行くに支障はない。苔むした古い大木の切株が点々とある。ピーク 1010 から右に折れて急降下、牛馬はピークを避け右側を巻いて行ったかと思われる。この辺りなど一部は踏み跡もなく分かり難い所があるがほぼ稜線を辿ればやがて踏み跡らしく径がある。8:40 頃地図にある左からの径は確認できない。8:45 その先の小ピーク 1012、周囲には紅葉も増え紅葉と杉の混合林。少しずつ高度を上げ、9:07、そして 9:13 緩やかなピークから右へカーブ、ヒメシャラの大小木数本、下地には鹿が食わないマツカゼソウのみ。9:22 ピークから右折。9:37 ピーク 1100m、稜線に「林七四」などと彫り込んだ石標が順に並んでいる。これは何の標柱か。

林道から尾根へのとりつき地点

ここから急な下り、やせ尾根、ここは牛馬にとってはやや難儀と思われる。南方に天主山を見ながら 9:48 ピーク 1108、ここには標柱なし。9:57「林九〇」小休止。10:17 右手南側斜面はカエデ等の紅葉、北側斜面は杉。10:22 稜線の肩を左折、ブナ、トガの大木、10:27 長い尾根、平たいピークを過ぎ下りに入る。10:37 ピークからやや左へ、左側は崖、ブナの中木あり、出発から 3ｋｍ。10:52 標高 1200m、5 枚葉のコシアブラの落葉、ここまで疎らに赤テープがあり、歩いた人もいると思われる。11:00 汗見～遠見山からの歩道に突き当り合流三叉路。ここはかなりはっきりした道である。ここで東斜面を見ながら大休止昼食。

なだらかな尾根

11:27 久保の息、切剥へ向け出発、桧林の中の平坦な道。11:52　1200m地点を右そして左へカーブすると、ほとんどカエデ等の紅葉黄葉がきれいな尾根の登り。11:58　1300m地点。12:25　1354mピーク、牛馬にはやや難所か、左折。12:40、地元で「久保の息」と呼ぶ稲積山への分岐着、小休止、標柱あり。ここから道は広くなる。かつて森林軌道があったとか。12:55 右斜面が開けて紅葉の絶景、初めて下界が見下ろせる。雁俣山、目丸山、甲佐岳、遠く雲仙も。13:00　1391m。右手前方に天主山に連なる尾根が迫る。暗いブナの木肌をバックに紅葉が映える。13:20 久保の息、帰路の時間を考慮し、ここで引き返すことにする。復路は 1475.8mのピークへ上がり、かつての古道？を辿る。13:25 ピーク 1475.8m。径らしき堀切を探しながら下る。14:00 稲積山分岐に出る。あとは往路を辿り下る。14:22　1300m地点、14:35 穴谷まですぐそこという標柱を通過、14:50 往路登ってきた囲集落への分岐。ここから汗見への下りに入る。14:55 遠見山頂上への分岐の標柱、遠見山を左へ巻いて 15:00 下り始めると急傾斜となるが、桧林の

中、ジグザグに切ってあり、牛馬も支障なし。15:22「那須往還、遠見山への登り口」表示板に下り着く。ここからの下り道は広くなり 2mほど、やがて舗装の林道、これを 2ｋｍ近く下った車のデポ地まで歩き、16:25 入山地点着、17 時近く鮎の瀬大橋帰着、17 時ごろ解散。

「林七四」の標柱

平坦な尾根筋

遠見山～久保の息間はしっかりした径

稲積山への分岐・地元ではここを久保の息という

稲積山分岐先の唯一の展望所からの景観、
付近では黒曜石が見られる

遠見山から遠見山登山口への下りは急勾配

「遠見山登山口・日向往還入り口　遠見山まで 40 分」とある

2021.11.17(水)　向霧立越調査③　汗見～遠見山登山口

山都町鮎の瀬大橋から東 5 ㎞程の木原谷集落を経て汗見地区から遠見山登山口付近までの現地調査。調査参加者 3 名(安場、石井、中林)

鮎の瀬大橋 6:45、打ち合わせ後 7:05 出発、木原谷への県道が上菅の先で工事中通行止め、う回路もなくやむなく白糸第二小先の道端に車を置いて歩くことになる。白谷川、白谷宮＝菅村阿蘇神社を右に見て、8:25 木原谷集落交差点の公民館を確認、たまたま出会った婦人に話を聞くと汗見には 4 軒あって今は 1 軒しか住んでいないという。ここを右折して汗見へ向かう。舗装された車道に竹林、桧林、杉林が迫る、白谷川を左岸に渡り、再び右岸に渡る汗見橋の袂で小休止 10 分。 9:34 汗見集落、といっても見えるのは 2 軒、人の姿はない。舗装の車道はここまで。右に沢を見ながら 9:35 左手の杉林の山に入る。踏み跡さえもはっきりしない。沢沿いにしばらく進む。杉林の中、勾配はかなり急である。牛馬は無理のような感じ。10:00 重機で押したような跡、下にはマツカゼソウのみ、800m地点、また同様の道らしき跡、10:20 829m少し右へ、10:30 土砂崩れ跡、左折するとまた同じような道らしき跡、その先を詰めると上方に林道のガードレールが見え、杉の造林の中をジグザグに登ると前回の調査で通った舗装した林道に出て 10：57 小休止。ＧＰＳで前回車のデポ地点近くであることを確認。11:10 出発して林道を 300mほど下り、(前回途中で引き返した)左手の尾根に上がることにして 11:19 尾根にとりつく。少し急こう配、しばらく上がると尾根筋に赤松の大木、11:40。この後は緩やかな登り、11:47 前回引

き返した鞍部 1050m地点、大休止昼食。この先、遠見山登山口までは前回歩いているのでここから引き返すことにする。12:28 下山開始、地形図にある破線の道を辿ろうと下るが、道はない。林道に出る直前はやはり急こう配の下り、しかし赤テープがあり人が通った形跡はある。14:05 林道に出る。この付近、かつて古道があったとすればこの林道工事のためそれが切断されたのではないかとも思われる。林道から往路の杉の造林地に入り往路を辿って下るが、途中から往路から外れわからなくなり、急傾斜の杉林の中を下り、やっと 14:10 汗見の民家の前に出て小休止。1423 出発、舗装道路の汗見橋手前から地形図の破線の近道に入ったが、次第に道は消え、最後はクマイチゴの棘に苦しみながら下るとやっと下の橋の袂に出た。あとは木原谷部落に戻り、15:30 白谷川白谷橋・菅村阿蘇神社＝白谷宮前そして工事現場を通り 15:50 上菅上の駐車地点着、16:00 頃鮎の瀬大橋着、16:20 頃解散。

汗見までは車道があり問題ない。一応、汗見～遠見山登山口間を通して歩き繋ぐことはできたが、汗見地区から上は踏み跡は判然としない、急傾斜が続き古道として使われていたかどうか、急斜面をジグザグに切れば可能かもしれないが。一般の登山道としてもこのままでは推奨できるルートではない。

木原谷部落

白谷宮=菅村阿蘇神社(菅～木原谷間にある)

汗見地区の人家

汗見から山道に入る

汗見～林道間の歩道らしき跡を登る

上の林道に出る

林道から上の尾根への取り付き地点

林道から上の尾根を登り詰めたピークの赤松の大木

上に述べました 3 回の現地調査で、古道向霧立越の宮崎、熊本両県側の入り口はおおよそ掴むことができました。残されたその両地点を結ぶ向霧立越の主要部分、即ち九州脊梁の主稜線の調査はまだこれからです。この間は椎矢峠などかつて通じていた林道が現在不通であり、途中からアクセスできないため、南北を通して歩かねばなりません。長距離に及ぶ九州山地の主稜線の歩行を考えると宿泊、車の回送等いろいろな課題が上がってきます。そこでこの部分は日足が長くなる春 3 月ごろを考えています。その際はまたご協力をお願いいたします。

また本部から第 2 次調査対象古道の発表があることになっています。支部推薦の古道も当然入って来るものと思われます。担当リーダーの方々を中心に今後の調査計画の設定をよろしくお願いいたします。

さらに、現地調査が済めば、収集した各種資料をまとめて、本部の編集方針に沿って、執筆作業に移らねばなりません。それぞれ把握されたいろいろな調査資料を提供していただくとともに、その方の準備もどうぞよろしくお願いいたします。

≪事務局より≫　(会員会友の異動 2021 年 8 月～12 月) : (敬称略)

新会友　　村上　浩明　(玉名市岱明町)
　　増田　修一　(熊本市東区)